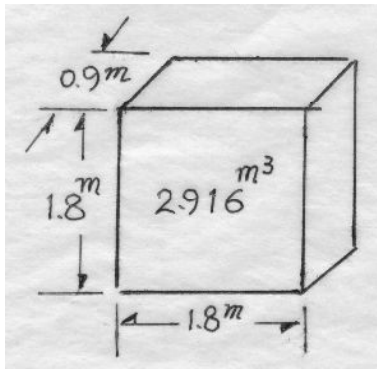


薪材の生産単位を理解統一するために



	旧青森局	旧秋田局
針	0.508	0.625
広	0.442	

薪を生産又は売買するとき、取引単位が一定でなければならない。

左の図は旧青森営林局で使用していた「一棚」。タナとは一定の長さの薪材(チップ材の場合もある)を高さと積み幅を一定にして土場に積み、販売したものである。

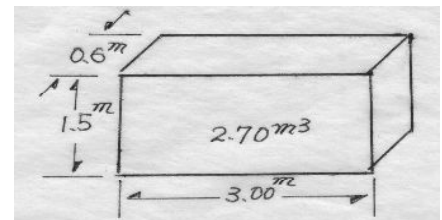
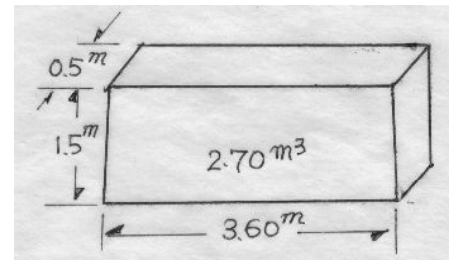
左の図の長さは尺貫法が基礎になっている。今の日本はメートル法の規格に決められているが、不思議なことに林業や家の建築規格は尺貫法(尺、寸単位)が圧倒的に多い。

ゆえに、林業の現場では丸太の長さを切るときの単位は〇尺〇寸で採材することが多いから、左図も三尺巾(90 cm)の材を六尺(1.8 尺) × 六尺で積んだ棚をロクロクと言う。

一棚の呼び方はロクロクのほか、サブロク(三尺×六尺…材の長さは三尺(90 cm)で一定にする)に積むこともあるので一棚がロクロクかサブロクかで倍の違いがある。

以上は層積であり、丸太の太さで空隙の差がある。この空隙を考慮して実際の材積を求めるための「係数」が決められていた。それが左の表である。

層積の換算係数
棚積み、の空隙を除いた実材積を求めるための係数。
針はスギなど針葉樹材、広は広葉樹材の係数で、曲がった枝や先端枝条などを対象にする場合が多いが、20 cm 前後の通直材となると「枝条端材」とは実材積が全く違ってくるため薪生産業者の信用が必要である。
旧山形町ではロクロク(6 尺×6 尺) 十石八斗は実材積七石ほど(換算率 0.648)と言われ、換算率は旧秋田営林局のそれに近い。



旧秋田営林局の一棚 (2 例)

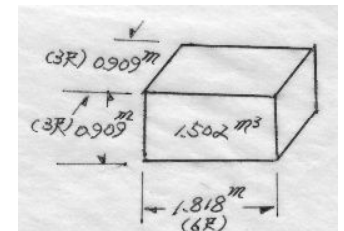
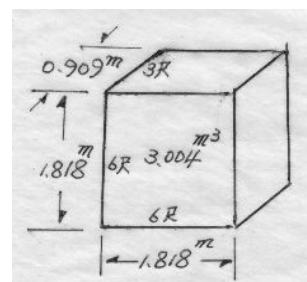
メートル法と尺貫法による丸太長さの決定

日本で家を建てる時の一間(いっけん)は普通 6 尺・1.82 尺(大木屋敷は 2 尺を超えるものもある)で計算される。素人の私は 10 mm 方眼紙で設計するため、一間 2 尺が計算も容易だ。

普通丸太を採材するときは 1.82 尺(正確には尺の倍数)の倍でやる。「とお尺」は 10 尺×0.3 尺で 3.0 尺、12 尺で 3.65 尺にそれぞれ延べ寸(鋸で切るときの余巾 5～10 cm)を足す。

一間を 2 尺で設計やパネル生産するときは 2 尺の倍数になり、針葉樹の建築材「定尺」は 4 尺プラス延べ寸 10 cm くらいを印す。

薪材は 3 尺(約 90 cm)のキノコホダ木と一緒に生産されることが多いから、長さ 90 センチの丸太材を右図のように積み、「棚」とするのである。



上の 2 図は尺の単位でロクロクとサブロクと言うが、三尺×三尺の場合はサンサンともいう。

薪の売買を一棚で話す場合、この三種類を確認して値段を決めなければならない。ちなみに、岩手久慈地方では山土場ナラ材でロクロク(一間とも言う) 2 万円、その半棚(サブロク)で 1 万円になる。運搬はサブロク一棚当たり 2 千円が相場(平成 25 年)。

枝条の曲がりが多く小径木が多い雑木の場合、ロクロク一棚あたり 5 千円ほどの安値(品による)。

薪材の伐採は樹液の動きが止まる時期に行うこと。

木材は寒中に伐採するのが一番乾きが良い。切つてからは間違っても梅雨など長雨に当てては乾かなくなり薪の消費は倍になる。